

聖霊降臨節第2主日礼拝 6月6日(日)

題 『かたくなな心を悲しむイエス』

テキスト：マルコによる福音書3章：1～6節

今日の聖書の個所は、安息日の規則を巡る2回目の出来事です。通常安息日論争と言われています。先週学びましたように、約2000年前イエスさまが地上を生きられた時代、ユダヤ教の規則には「安息日には仕事をしてはいけない。」との規則があったのです。

主イエスは、安息日という戒め、規則を無視はされませんが、安息日は、人がよりよく生きるために神によって定められたのだ。そして規則よりも命を、愛を優先されたのです。それが神さまの心だと言われるのです。

これが福音であり、良き知らせなのです。この福音に多くの人たちが救われたのです。これは今の時代にもわたしたちにも通用する教えです。

「◆手の萎えた人をいやす」当時、医療行為も仕事であり、生命に危険がある場合を除いて安息日には行ってもいけないとみなされていたのです。しかし、イエスさまは愛を優先され癒しの業を行われたのです。このことがファリサイ派の人々の反感を買ったのです。

1:イエスはまた会堂にお入りになった。ユダヤ教の会堂で、シナゴグと呼ばれます。礼拝や、子どもたちの宗教教育、また集まって話し合いにも用いられたようです。どの町にもシナゴグはあったようで、カファルナウムの会堂ではないかと言われているのですが、今日発掘され復旧もされて来ています。

「そこに片手の萎えた人がいた。」と聖書にあります。

この時、人々、特に宗教的な規則を守ることを大切にしているファリサイ派の人々は、2:人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。

彼らは、安息日に麦の穂を摘んではいけないのに、弟子たちが摘んで食べたことをイエスに問うた時、イエスに論破されたことに不満を持っていたようです。そこで、イエスの行動を見張り、イエスを当局に訴えることを考えていたようです。2:人々はイエスを訴えようと思って、安息日にイエスが病気をいやされるかどうか、注目していた。」「注目していた。」。ここに悪意を感じるのです。人間の悪い心の思いが、行動を生み出すのです。悲しいことだと思います。後にもありますように、徒党を組んでイエスを捕えようと計画されて行くのです。それは十字架へと向かいます。イエスのガリラヤ伝道の最初の頃からファリサイ派の人々のイエスへの批判はあったようです。

しかし、皮肉と言いますか、このファリサイ派の人々はイエスによって厳しく問われることとなるのです。神さまは、どんな中でも、人間の悪巧みを見ておられるのだということです。人はごまかせても、神さまをごまかすことは遂にできないのです。

さて、シナゴグの中で、

3:節、手の萎えた人に、イエスは「真ん中に立ちなさい」と言われました。

当時人々が蔑んでいた手の萎えた人を見て、「真ん中に立ちなさい」と言われたのです。イエスさまは、規則ではなく、人を見られる方なのです。人々が端に追いやっていた、その人を「真ん中に立ちなさい」と言われた。その人を真ん中に呼び出されるのです。神さまの大いなる働きがこの人の上に行われるのです。わたしたちも神に呼び出される時があるのです。

イエスが規則を守るか、破るかだけに心を支配されていた人々に向かって、主イエスは4節で「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」と呼びかけ、問われたのです。彼らの良心に語りかけられたと思うのです。

しかし、「彼らは黙っていた。」のです。それを見ている「黙り続ける人々」もいました。サイレントマジョリティーという言葉をご存じでしょうか。日本語では「静かな大衆」とか「物言わぬ多数派」となるようです。何でも必要以上に声をあげることもどうかと思いますが、人の目を気にして、回りの人々の声を恐れて、自分の意見を言わない人々の事です。

わたしを含めて、そういう人々が多いのです。この黙り続ける多数の人々、サイレントマジョリティーたちが、組織や社会、そして国をも維持しているのです。日本は、ヨーロッパやアメリカと比べて、その傾向が強い国だと言われて来ました。長年の文化が影響しているのだと思えます。

相手を尊重しながらも、自分の思いや意見を伝えることの大切さ。良いものを変えない知恵と時には変える勇気を持つこと。そのための備えと祈りが必要なのです。「5:そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら」とありますが、胸に突き刺さる言葉です。イエスさまは、黙り続ける人たちに怒(いか)られるのです。「彼らのかたくなな心を悲しみながら、」とあります。イエスさまは心から悲しまれたのです。

「かたくなな心」:「かたくな」とは、うなじが固い、から来ている言葉と聞いたことがあります。昔、イスラエルの民が奴隷から解放されたエジプト脱出の時、モーセのことばを拒み続けたエジプト王ファラオに対して「かたくな」という言葉が使われています。イエスさまはの怒りは、気づいていながら黙りつづける人間のかたくなな心に対する悲しみゆえの憤りだと思います。

心のかたくなさは、時に権力を持つ人間の信念から来る場合もあると思います。しかし、これがその人や、家族、属している集団を、国の歩むべき道を誤らせることもあるのだと思います。

このわたしたち人間の中にあるかたくなな心は、遂に神の子イエスを十字架へとつけたのです。神さまは、独り子イエスを人間を信じてこの世に遣わされたのですが、人間は率直に言えば、罪なきイエスを十字架につけたのです。人間の罪深さを思います。

イエスさまは、人間の罪、そのかたくなな心を背負って十字架に向かわれたのだと言ってよいでしょう。

ですから私たちは、まず十字架の主イエスの前にひざまずいて頭を垂れるしかないのです。よみがえらせたイエスさまは、気落ちした弟子たちに「平和があるように。」と温かいことばを語って、この世へと派遣されました。

わたしたちも弟子たちのように派遣された者たちなのです。

「黙り続ける人々、サイレントマジョリティー」からの一歩踏み出し、解放、自由の道へと向かう人生の旅に出かけるのです。

主イエスはその人に、「手を伸ばしなさい」と言われました。伸ばすと、手は元どおりになった。体と心の回復が起こったのです。神さまの回復と解放への愛の働きが起こったのです。この人に新しい人生の歩が始まって行くのです。救い主イエスは人間を救うため、平安を与え、自由と解放を与えるためにこの世界に来てくださったのです。

しかし、現実には、社会の中には闇の部分が残っています。この世には悪と思える事があり、闇の部分はあるのです。しかし、世界は暗くても、呪いと憎しみの下でではなく、救い主イエスにあって神の愛と恵み、祝福の下にあるのです。

ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、

どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた 6 節にあります。

「ヘロデ派」とは、ヘロデ王と中心とする政治的集団のことです。

もともとファリサイ派の人々と、ヘロデ派の人々は、考え方は違うのです。

ファリサイ派はユダヤ主義であり、ヘロデ派はユダヤを治めていたローマ寄りの仲の悪い人たち同志でしたが、イエスを捕えるということでは一致したのです。わたしたちもやがて輝く天の都に帰る時まで、主と共なる人生の旅は続いて行くのです。これから先、どのような人生を送ろうとも心の中に主イエスが共にいてくださるので恐れることはないのです。主イエスという愛のワクチンは、わたしたちにすでにうたれているのです。

皆様の上に、主の平安を祈ります。

◆手の萎えた人をいやす

- 1:イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。
- 2:人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。
- 3:イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言われた。
- 4:そして人々にこう言われた。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」
彼らは黙っていた。
- 5:そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。
- 6:ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。